

## 生物多様性未来継承プラン検討委員会

日 時 令和元年9月9日(月) 15時～17時

場 所 京都府庁 文化スポーツ部・府民環境部会議室

【委員】細谷座長、浅野委員、加藤委員、佐久間委員、竹門委員、辻本委員、鳥居委員、渡部委員

【オブザーバー】石崎副課長(文化財保護課)

【事務局】高屋副部長、永本課長、森課長補佐、小田嶋副主査

### ☆アーカイブについて

- ・府内で専門家が蓄積してきた情報を確実に収集するところから始めるのは、良い方向性。
- ・構築したデータベースの利活用については、レッドリストの改訂や生物多様性地域戦略の推進など、府の施策と関連づけるのがよい。
- ・様々な事業に繋げていけるようなデータの集め方をしなければならない。
- ・アーカイブをどういう方向性でリードしていくのかという議論がまず必要。
- ・将来的なモデル事業として、「公共事業を行うときにデータベースを活用することで自然環境を把握できる」ということも考えられる。そうしたモデル事業に繋がれば、データベースは多分野の事業にも資する有用なものであると言えることができる。
- ・公共事業の際には自然環境調査の情報を必ずこのデータベースに登録してもらうという仕組みを作れば、さらなるデータベースの拡充に繋がるだろう。「『環』の公共事業」における目標設定や評価にも役に立つはず。

### ☆プラットフォームについて

- ・「情報基盤(アーカイブ)の拡張の方向を明確にする」ことを目標としてもよいのでは。
- ・「情報の利活用」の企画を誰がするのが重要。数年にわたり一貫した企画が必要。
- ・プラットフォームでは、例えば「文化の関連施策にも役に立つデータベースがほしい」というようなことをしっかり議論しなければならない。
- ・「生物を守る」だけでなく「生物の住んでいた場を守る」ことが重要であり、そうした意識啓発をどうするかということもプラットフォームのテーマになるだろう。
- ・プラットフォームで当面話題とすべきことは、観光や農業などよりも、「生物多様性センターをどうやってつくっていくのか」、「データベースはどうすれば魅力的なものになるか」ということではないか。
- ・プラットフォームは、皆さんの活動や繋がりを喚起するようなものの方がよい。
- ・企業や府民には、自分たちの行動が「生物多様性の衰退」という外部不経済を起こしていることや、生物が絶滅していくことにより自分たちがどのような損失を受けるかということは、なかなか認識しづらい。それを理解してもらうように「翻訳」する機能が必要。

プラットフォームで、例えば京都で実際に起こっている事例を提示し、議論を深めていくことで、企業も府民も生物多様性の問題を自分事として考えることができるのでは。

- 生物多様性に関しては、経済学で言う「機会費用」がゼロだと思われがちである。保全が企業の利益に繋がる場合であれば、機会費用が正しく評価され、保全活動が企業活動の中に入れ込まれるのだが、生物多様性はなかなか因果関係が明確ではないために難しい。しかし、これまで私たちは後から後悔するばかりであった。「後悔しないようにする」というのは一つの目的となり得る。絶滅は不可逆的なプロセスであり、コストは無限大になる。それは伝統文化も同じである。
- プラットフォームを実際に運用していく必要のある地域が、主体的にそうした会議を作っていく必要がある。京都府全域のプラットフォームではなく、地域ごとに、機能する組織が有機的に繋がる場とならなければならない。
- 地域ごとに様々な意見を集め、その中で、どのように地域に合わせた活動ができるのかという議論をするべき。
- 北部、中部、南部などそれぞれの地域でステイクホルダーになりうる人に呼びかけ、各地域でできることや、必要なもの、組織、人、情報、場について議論するのも一案。その地域で拠点になりうる場所や、拠点づくりの進め方についても検討できればよい。
- 地域の担い手の人たちと地域の自然を考えている人たちが何を大事だと思っているか、どこにどういう可能性があるのかということ、しっかりマイニングし、論点を掴むことができれば、きわめて有意義な会になると思う。
- 「海の京都」「山の京都」「森の京都」という言葉でそれぞれの地域が集まるのはどうか。
- プラットフォームのタイトルは、「〇〇の地域資源を考える～レッドデータブックが示す私たちが失いつつあるもの～」ではどうか。レッドデータブックが示しているのは、私たちが失いつつあるものは生物だけではない、暮らしであり、景観である、ということ。それを絡めれば、レッドデータブックをテーマに幅広い層に訴えることができる。
- 地域の中で、生物多様性とこれからどういう形で付き合っていかなければならないのか、地域の中での課題である「生業」をどうしていくのかを繋げるのがこのプラットフォームであり、そういった議論ができるようにしていく必要がある。
- 演者については、外から来た人よりは、地元でよく知られた人が話すことが重要。

## ☆環境学習について

- 学校教育現場では、様々な環境教育のプログラムが飽和しておりなかなか使いきれない。特に興味を惹くように上手に見せていかなければ、学校側にも活用されにくいだろう。
- 環境教育は、いわゆる課外活動である放課後教室や休日の体験教室の方がマッチングがよいこともある。
- 学校以外での環境教育を充実させ、その地域の中で行われる自然体験教室等の課外活動と学校での環境教育を一体的に推進していくことによって、より地域全体の環境教育の充実が図れると思う。子供食堂のような活動と関連させ、社会問題のマルチな解決を狙う方

が、SDGs 的でもあるだろう。

- 子供の教育、貧困対策、地域活性化などの様々な事業と生物多様性センターが連携していければ、もっと面白いことができるはず。京都府や市町村の施策で連携していけそうなものを洗い出していくことが必要。

## ☆生物多様性センターについて

- 今後は、「人と情報の集まる拠点」の「人」の方をどうしていくかが難しい点。センターには、数年間にわたって関わり続けるような、主軸になる人がいることが非常に重要。
- 情報基盤の整備やプラットフォームの構築を進める中で、「地域の中での希少種のまとめり」「その地域の特性と希少種の多様性の関係」といった有機的な繋がりを明らかにすることを目指すべき。地域はそれを利用して、守るべき対象を明確にし、そのための具体的な対策を講じるとよい。
- アーカイブを段階的・継続的に充実させていく体制を整えることが、センターの第一歩。
- アーカイブもプラットフォームも、「その地域の人々の暮らしと生物多様性の連関」を柱にした地域らしさ、京都らしさを出していくことを、初めから方向性の中に含めて、イメージを共有しながら進めていく必要がある。一般論では意味がない。
- レッドデータブックを通じて「何が失われつつあるのか」を示すことが重要。生物だけでなく「暮らしが失われている」ということを示さなければならない。
- マクロな生物学では、在野の人でも研究者並みの成果を出すことがある。そうした在野の人たちの活動を盛り上げ、その力を取り込んでいけるような仕掛けが必要。実際に、レッドデータブックの情報も、在野の人からの提供による部分が大きい。
- 科学の民主化の中で、「市民科学」をどのように基礎に据えるかが課題。博物館でも「教育」や「啓発」という言葉は上から目線でよくないとされ始めている。センターの役割は教育や啓発といった一方的なものではなく、市民との連携・交流でなければならない。
- そうした連携は個人ベースではすでに存在しているが、地域にはそのような情報を持ち寄って議論する場がない。それぞれの地域に拠点ができていけば、センターが博物館に向かっていく手掛かりになると思う。
- センターは様々な府民の方にご協力・ご支援をお願いし、役割を担っていただきながら立ち上げていくことになると思う。従って、センターの立ち上げ方については、そうした様々な方々が活動できる環境や地盤を整えるために、どこから手をつけていくのが最も現実的なのか、ということを考えてよい。「府民と一緒に生物多様性を考える」という形を作らなければならないだろう。
- プラットフォームには、羅針盤的感覚を持つ世話係の役割が必要であり、その役割を生物多様性センターが果たすのではないかな。

以上